

あした浜辺を さまよえば、／昔のごとぞ しのばるる
 風の音よ、雲のさまよ、／よする波も かいの色も二、三節は略)

日ごろ自然に口ずさんでしまうこの歌は秋田出身の作曲家成田為三のもの。大正初期に竹久夢二装丁の楽譜が出版され、大正ロマンの風潮に乗って大きな反響を呼んで広く歌われてきた。戦後には音楽教科書に採用されて、荒城の月や赤とんぼなどと心に残る歌として親しまれている。

作詞者は林古溪。東京生まれの歌人で漢文学者。江戸時代の儒学者林羅山に連なる代々学者の家系。少年時代を過ごした辻堂海岸をイメージしたという。第一と第二の二つの節が、ひらがな表記の多い平易な歌詞なのに対し、第三節は一転、難解な言葉がならぶ。作詞者が後になって、この節が原作の趣を失っているとしてこの部分が歌われることを望まなかったといわれ、この名作は二節だけで終わっている。

成田は明治二六年、秋田県米内沢村(北秋田市)に生まれる。師範学校を出て県内の小学校教師をした後東京音楽学校に入学。在学中に山田耕作の指導を受けて、浜辺の歌を作った。当時は児童文芸雑誌『赤い鳥』に発表された北原白秋、西条八十、野口雨情などの童謡・童話に中山晋平、梁田貞、弘田竜太郎、本居長世などが曲を付け発表していた。

西条八十が作った童謡、カナリア(唄を忘れたカナリアは、後ろの山に棄てましょか。いえいえそれはなりません)に成田が作曲し、これが童謡第一号として有名になった。その後、雨、赤い鳥小鳥、ちんちん千鳥など白秋の作品に曲をつけている。

成田のふるさと米内沢は、マタギの里で知られる阿仁谷の北端、阿仁川が米代川と合流する田園地帯にある。森吉山が遠望できる生家跡に記念館「浜辺の歌音楽館」がある。大正ロマンを感じさせる緑の屋根と外観が六角形の洋館。浜辺の歌の自筆楽譜、ドイツ留学時代の書簡などの資料、ホール舞台には為三の口ポットがピアノ演奏をしている。浜辺の歌の変奏曲が圧巻だった。

参考 第三節 はやち忽ち波を吹き 赤裳の裾を濡れひぢし、病みし我は すでに癒えて、／浜辺の真砂 踏むや今は